

サンクト・ペテルブルグにおける文久遣欧使節団

КЛИМОВ Vadim

サンクト・ペテルブルグ国立大学東洋学部

文久使節団について主にロシア語の史料はロシア帝国外交文書館（АВПРИ）、ロシア国立歴史文書館（РГИА）、ロシア国立海軍文書館（РГАВМФ）、ロシア国立連邦文書館（ГАРФ）にある。他の文書館にもあるかもしれない。さらにロシアの新聞と雑誌は貴重な史料がある。ロシアの学者が研究論文を発表した。特にファインベルグ¹（Файнберг Э.Я.）、クタコフ（Кутаков Л.Н.）²、テエレヴコ（Черевко К.Е.）³、センテンコ（Сенченко И.А.）⁴、ソコロフ（Соколов А.Р.）⁵の日ロ関係研究の成果が上げられた。それぞれの研究者の本にもこのテーマが触れられた。

サンクト・ペテルブルグにおける竹内使節団について日本の研究者が書いた論文が少なくないのである。すなわち安田孝一「ペテルブルグの福沢諭吉」、山口一夫「福沢諭吉の西航巡歴」、芳賀徹「大君の使節」、宮永孝「文久二年のヨーロッパ報告」、宮永孝「幕末遣欧使節団」、鈴木健夫 P・スノードン G・ツォーベル「ヨーロッパ人の見た文久使節団（イギリス・ドイツ・ロシア）」、日本語の貴重な資料は団員たちの日記や幕府へのレポートなどがある。

使節団はヨーロッパへ行く前に国際国内事情はととも複雑であった。大老井伊直弼は安政5年6月（1858）日米修好通商条約に調印した。彼は天皇陛下の勅令を得られないまま調印した。そのころ13代将軍は徳川家定（1824-1858）であった。幕府はついでオランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同様の条約を締結した（安政の五カ国条約）。この条約には、1）神奈川・長崎・兵庫・新潟の開港と江戸・大阪の開市、2）通商は自由貿易とすること、3）開港場に外国人の居留地内での領事裁判権を認め、実際には日本が自主的に改正できない不平等条約であった。

日米修好通商条約

第三条 下田、箱館の港の外、次にいふ所を場所を左の期限より開くべし。

神奈川（中略）西洋紀元千八百五十九年七月四日

長崎（中略）同断

新潟（中略）千八百六十一年一月一日

兵庫（中略）千八百六十三年一月一日（中略）

神奈川港を開く後六ヶ月にして下田港は閉鎖すべし。此箇条の内に載たる各地は罌墨（米）利加人に居留を許すべし。・・・双方の国人、品物を売買する事總て障りなく、其拙方等に付ては日本役人これに立会はず。

第四条 總て告地に輸入輸出の品々、別冊の通、日本役所へ運上を納むべし。（中略）

第六条 日本人に対し、法を犯せる罌墨（米）利加人は、罌墨（米）利加コンシユル裁断（判）所にて吟味の上、罌墨（米）利加の法度を

以て罰すべし。罌墨（米）利加人へ（に）対し法を犯したる日本人は、日本役人糺の上、日本の法度を以て罰すべし。
（『大日本古文書』、幕末外国関係文書20）

幕府は孝明天皇と朝廷と反対派の大名と衝突した。万延元年（1860）、井伊直弼は桜田門外で水戸藩の志士に暗殺された（桜田門外の変）。

井伊直弼の暗殺の後、幕政の中心にあったのは老中安藤信正（1819-1871）だ。

その頃、貿易は大幅な輸出超過となった。日本からは、生糸・茶・蚕卵紙・海産物・絹織物などの半製品・食料品が多かった。毛織物・綿織物などの繊維製品や艦船・鉄砲などの軍需品が輸入された。物価が上昇した。さらに、日本と外国との金銀比価が違った。金銀の交換比率は、外国では1：15、日本では1：5と著しい違いがあったので、ヨーロッパ人は銀貨を日本に持ち込んで、日本の金貨を安く手に入れ、約50万両の金貨が流出した。多量の金貨は一時的に外国に流出した。庶民の生活はひどくなった。そのため貿易に対する反感が高まって、激しい攘夷運動が起こる原因の一つになった。幕府は修好通商条約(第三条)に規定された江戸・大阪・兵庫・新潟の開市開港を実施する間に合わない状態になった。開市開港延期を条約締盟国の公使と交渉を始めた。イギリス公使ラザーフォード・オールコック（1809-1897）は文久使節団を派遣する準備に大きな役割を果たした。江戸幕府の長い政治の中で、ヨーロッパに使節団が派遣されるのは最初であった。

使節の人選は、主に老中安藤信正が当たり、1861年3月中に正史・副使・立合監察(目付)らが決まった。正史には、外国奉行兼勘定奉行竹内保徳(下野守)、副使には神奈川奉行兼外国奉行松平康直(石見守)、立合監察には京極高朗らが特命全権公使に決定した。老中安藤は回訓を發し、開市開港延期の談判とならんで政治・経済・軍事など広義の西洋文明全般にわたる調査研究を命じた。

使節団員

特命全権公使

- 1) 正使 勘定奉行兼外国奉行 竹内下野守 (56歳)
- 2) 副使 神奈川奉行兼外国奉行 松平石見守 (31歳)
- 3) 目付 京極能登守 (38歳)
- 4) 組頭 外国奉行支配組頭 柴田貞太郎 (39歳)
- 5) 勘定役 日高圭三郎為善 (25歳)
- 6) 調役並 水品樂太郎 (31歳)
- 7) 同 岡崎藤左衛門 (27歳)
- 8) 普請役 進物取次上番格普請役 益頭駿次郎 (33歳)
- 9) 定役元々 上田友助 (44歳)
- 10) 定役 森鉢太郎 (28歳)
- 11) 同心 齊藤大之進 (40歳)
- 12) 徒目付 福田作太郎 (29歳)
- 13) 小人目付 高松彦三郎 (43歳)
- 14) 同 山田八郎 (40歳)

サンクト・ペテルブルグにおける文久遣欧使節団

- 15) 通詞 福地源一郎 (21歳)
- 16) 同 唐通事 神奈川奉行所勤務 太田源三郎 (27歳)
- 17) 外交方翻訳局員(中津藩士) 福沢諭吉 (27歳)
- 18) 同 立広作 (17歳)
- 19) 翻訳方兼医師 箕作秋坪 (37歳)
- 20) 同 松木弘安 (30歳)
- 21) 医師 (幕府漢方表医師) 高島祐啓 (38歳)
- 22) 同 川崎道民勤 (佐賀藩医) (31歳)

家僕

- 竹内下野守家来
- 23) 高間応輔 (48歳)
 - 24) 長尾丈輔 (32歳)
松平石見守家来
 - 25) 野沢都田 (42歳?)
 - 26) 市川渡 (39歳?)
京極能登守家来
 - 27) 黒沢新左衛門 (53歳)
 - 28) 岩崎豊太夫 (35歳?)
柴田貞太郎家来
 - 29) 長持五郎次 (16歳?)
船中賄方並小使
 - 30) 加賀藩 加賀中納言家来 佐野貞輔鼎 (33歳?)
 - 31) 佐賀藩 松平肥前守家来 石黒寛二 (40歳?)
 - 32) 同 岡鹿之助 (30歳?)
 - 33) 長州藩 松平大膳大夫家来 杉徳輔 (孫七郎) (27歳)
 - 34) 阿波藩 松平阿波守家来 原覚蔵 (一介) (24歳?)
 - 35) 杵築藩 松平親貴家来 佐藤垣蔵秀長 (41歳?)
 - 36) 伊勢屋八衛 (ご用達) 手代 重兵衛 (26歳?)

イギリス人

- イギリス公使館員 マクドナルド
- 37) 勘定格調役 淵辺徳蔵 (45歳)
 - 38) 調役格通弁御用頭取 森山多吉郎 (42歳?)

淵辺と森山は帰国するイギリス公使オールコックに随行してヨーロッパに来て、ロンドンで使節団に合流した。仕官は24名で、召し使えは11名で、コックは3名である。万延元年新見正興の遣米使節団の数は77名で、ほぼ半数である。

ロシア国立文書館にいくつかの使節団のネームリストが保管されている。アレクサンドル2世が日本使節団を謁見したネームリストを参考にする。

1. Старший посланник Такенауци Симоцкено-Ками (Takeno-Ouzy Simozkéno-Kami).

2. Два младших посланника Кейгоку Нотоно-Ками (Ken-goku Notonô- Kami) и Мацьдаира Ивамино-Ками (Matsu-daira Ywamino-Kami).
3. Прокурор Сибата Садатароо (Si-bata Sada-ta-ro).
4. Секретарь Морияма Такицироо (Môri-yama Takitsiro).
5. Помощник прокурора Факуда Сакутароо (Fakuda Sâku-ta-rô)
6. Офицеры первого класса Оказаки Тодзаемом (Okasâki Tô-sayemom), Мидцызина Ракутаро (Midsusîna Râku-ta-rô) , Хидака Кайцзабуроо (Hidâka Kei-Sabu-rô), Фуцзинобе Токуцо (Futsi-no-be Tôkuso)
7. Офицеры второго класса Ямадо Хатири (Yamada Hatsirô), Такамацу Хикосабуро (Takomatsu Hiko-Sâburô), Сайто Дайносин (Saito Daimosin), Мори Хацитароо (Mori Hatsu-Tarô), Уэда Юске (Uyeda Yuské) и Масидзу Сундзироо (Masîdsu Sun-Dsîrô).
8. Врачи (первого и второго классов соответственно) Такасима Юке (Takâsima Yu-kei) и Кавасаки Домин (Kawasaki Dô-min)
9. Переводчики Ода Генцзабуроо (Ohoda Gen-S'aburô), Фукусаву Укици (Fukusâwa Jukitsi), Тацико Саку (Tatsi-kô Saku) и Фукудзи Генчжироо (Fukudsi Gen-itsi-rô)
10. Письмоводители Мицкури Шухе (Mitsikuri Scu-hei) и Мацуки Кохан (Matsûki Ko-an)⁶.

このネーム・リストによると、ロシア語の日本使節団の名字と名前は読みにくいだ。まだ日本語単語のロシア文字によるふさわしい記号もなかった。またロシア人は日本の公家と武家の称号も分らなかったと思う。

文久遣欧使節団には下級の団員は6名第一回目の外交団（万延元年の遣米使節団）に派遣された。

徒目付	日高圭三郎
勘定組頭支配普請役	増頭駿次郎
御雇医師	川崎道民
賄方	佐野鼎
賄方	佐藤垣蔵
傭通詞	福沢諭吉

ジョン・ヘイ艦長は日本使節団とともに品川を出向するのは、1862年1月21日である。文久使節団はイギリス艦長オーディン号でヨーロッパへ向かった。ルートは江戸・香港・シンガポール・トリカマリ（セイロン）・ガール（セイロン）・アデン・スエズである。

1862年4月3日に竹内使節団はヒマラヤ号でマルセール港に着いた。1862年4月7日、汽車は午前10時ごろ出発して、パリーに着くのは、夕方の7時ごろリヨン駅である。1862年4年13日、フランス皇帝ナポレオン三世は（1808-1873）日本使節団を謁見した。ホテルに戻った使節団は写真師ナデルに記念写真を撮ってもらった。使節団はパリーでフランス外務省の代表委員との会談が三回あった。日本使節団は外交交渉においては成果を挙げることはできなかったのである。イギリスへ向かった。

竹内使節団はフランス軍艦「コルス」号に乗って、イギリスへ行った。

5月9日に日本使節団はラッセル外相を訪れて、「ロンドン覚書」に調印した。その議定書によると、新潟・兵庫の開港と江戸・大阪の開市を延期すること、その代償として対馬の開港の建議すること、酒類とガラス器具の税率の軽減すること、横浜・長崎に保税倉庫を設けること、平民の雇入れに関する制限の徹廃すること、大名または代理人が直接外国人と交易することを妨げないこと、外国人と日本人との自由交際を妨げさせないことを同意するそうである。ヨーロッパ締盟各国はこの「ロンドン覚書」を参考にした。5月15日に文久遣欧使節団は約一ヵ月半ほどイギリスに滞在して、イギリスを発って、オランダの軍艦「アルジュノ」に乗って、オランダに向かった。

5月17日にオランダに到着した。6月5日に日本使節団はオランダ国王の謁見をもらった。オランダからプロシア（ベルリン）へ汽車で行った。6月22日（7月18日）にベルリンに到着した。24日に正使と副使らは外務大臣、内務大臣、式部長官を訪ねた。25日は謁見の日であった。7月10日（8月5日）はベルリンの出発の日であった。

日本使節団は7月18日から8月5日まで19日間ベルリンに滞在した。竹内使節団は港湾都市シュウイネミュンデ（現在のポランド領スフィンウシチュ）でロシア蒸気艦「スメリイ」号に乗って、シュウイネミュンデを出航した。乗組員の海軍大尉のモザースキ（Mozhaiskii）はプチャーチン使節団の団員の一人であった。下田に行ったことがある。彼は日本語を多少解することができたらしい。

8月8日（7月13日）夜の10時ごろクロンシュタット港内に到着した。気温は13度であった。日本人は防寒着物を着た。クロンシュタットからサンクト・ペテルブルグのイギリス川岸通りの栈橋まで蒸気船「ストレルナ」丸で到着した。ここで歓迎式が行われた。使節団員はロシア政府の代表者と一緒に立派な馬車に乗って、「予備宮殿」に向かった。向かいに行った外務省アジア局館員は大和夫（ヤマトフ）であった。サンクト・ペテルブルグの当時の人口は約55万人だそうである。日本使節団はフランスでも、イギリスでも、オランダでも、プロシアでもホテルに泊まることになった。ロシア帝国の政府はサンクト・ペテルブルグに適当なホテルが見つからなかったから、竹内使節団はいわゆる予備宮殿に泊まった。皇帝の望みは暖かかったらエラーギン島宮殿に留めること、寒かったら予備宮殿に留めることであった。「予備宮殿」は皇帝の離宮である「冬の宮殿」に近いし、中心地にあるし、見所が多いという理由もあった。福沢諭吉は（「西航記」）において「第四時、国帝の客館に着。館は帝宮と相隣りて、館の前はナわ川なり。眺望最好し。此館は帝宮に」属し、外国の貴客を持つ為め設ける者にて、尋常の旅宿にあらず」と述べている。山口一夫と宮永孝によって、「予備宮殿」は「大理石宮殿」と見做されている。しかし今「予備宮殿」は残っていないで、再建設されて「ウラヂミルスキー宮殿」になったらしいである⁷。「予備宮殿」は修繕されて、時計10個を運んできて、じこくを合わせた。日本人の習慣を合わせるような努力がなされた。すべての準備はロシア外務省アジア局の日本人仕官ヤマトフ（大和夫）が書いた覚書によって行われた。福沢諭吉の「翁自伝」によると、ロシア首都には日本人がいるに違いないと考えた。

8月11日（7月16日）予備宮殿にはロシア外務省の高官が姿を見せた。来るべき謁見式の打ち合わせに着ただろう。歓迎謁見のための儀式が大和夫（橋耕斎）の覚書によって編成された。儀式を編成するにあたり、ペルシャ全権大使の接待の経験に

基づいて編成された。ペルシャ大使は1855年12月にサンクト・ペテルブルグに到着した。

8月12日（7月17日）には12時過ぎ三使は馬車で外務省に出かけた。式部官長を訪れ、午後1時半過ぎ予備宮殿に帰った。

8月14日（7月19日）日本使節団は「ゲオルギーの間」でアレクサンドル二世の謁見を貰った。「ゲオルギーの間」は玉座の間である。竹内下野守は、「大君の皇帝宛書状を手にもち、つぎのようにあいさつした。

「皇帝閣下、私どもは、大君の命に従い、今日、閣下に謁見する栄誉を得ました。両国の間の条約の締結以来、両国の関係は徐々にはってんしてきています。その結果、大君は、われわれに、大君の親書を閣下に差し出し、大君の率直な誠意を示し、条約にある約束を更新するよう、命じられました。この機会に、われわれは、皇帝閣下はの栄誉と臣民の幸福を祈ります。

この挨拶は、私設秘書官森山によってオランダ語に訳され、それをイエッセンがロシア語にして読み上げた。正使は次いで大君の親書を取り出し、それを皇帝閣下に差し出した。皇帝閣下はそれを大法官代理の手に渡した。

閣下の返書は、ゴルチャコフ公によって次のように読み上げられた。

大君も代理人を迎えたことはとくに喜ばしいことであります。ロシアと日本との関係は常に親密でありました。両国が隣接していることとそこから生じる共通の利害は、両国の関係の継続と強化の保障となっています。私は、大君が使節を派遣することによって示した友情とあなた方の仲介によって閣下が示している気持ちを評価します。私の首都でのあなた方の滞在が、ロシアの日本にたいする誠意をあなた方に納得させることを期待します。

その挨拶は、イエッセンによってロシア語からオランダ語に訳され、森山によって日本語に訳された⁸。

鈴木健夫によると、使節団の正使はロシア帝国の皇帝に挨拶をかけるとき、皇帝閣下の称号(皇帝陛下ではなくて、殿下ではなくて、閣下?)を使ったそうである。鈴木健夫が引用する信任状の内容は称号以外にロシア国立歴史文書館に保管している文書にまったく一致している。ロシア史料による、ロシア帝国の皇帝は大君にたいして殿下ではなくて、陛下の称号を使ったそうである⁹。おそらくその時ロシアでは天皇陛下と大君殿下との関係と権限はまだはっきり理解することができなかったのである。

謁見式がすむと、使節団は予備宮殿に帰った。

ロシア政府は大君および使節団員への贈り物を差し上げた。贈り物はロシア帝国の文化的、科学的、産業的発展の成果を示すためであった。将軍へは、サーブルを2本以外に船の模型、地図も贈呈した。ロシア帝国の皇帝へ幕府の贈り物は14の箱をロンドン滞在ロシア大使館から蒸気船「デルフィン」（「海豚」）が運んできた。5個の竹の屏風や2本のサーブル（刀?）や鞍やカーテンや10点の絵などがあつた。贈り物のリストが残っている¹⁰。2本の刀と鞍はツアルスコエ・セロー（現在プシキン市）の武器庫に保管された。日本の絵は10点ガッチナ宮殿の中国画

廊に展示された。使節団員へはみんな贈り物は差し上げられた。総額は763ルーブルであった。

8月15日（7月20日）。正使と副使は三人で午前11時過ぎ予備宮殿を出て、皇太子宅、ロシア駐在フランス公使、外務省次官などを訪れた。午後から冬宮殿を見学して5時過ぎ帰った。

8月16日（7月21日）日外務省アジア局の伯イグナテフが予備宮殿に来て、サハリン境界画定の件で訪れただろう。

8月17日（7月22日）三使らは冬宮殿を訪れて見学した。

8月18日（7月23日）午後10時過ぎ三使は各国の大使館（公使館）訪問に出かけた。午後1時過ぎペトロパブロフスカヤ要塞を見学した。

8月19日（7月24日）午後2時過ぎ競馬見物のためクラスノエ・セローに出かけた。

8月20日（7月25日）日本使節団は午前7時半に予備宮殿を出て、汽車に乗ってまたクラスノエ・セローへ向かった。皇帝をはじめロシアの貴族と一緒に歩兵、砲兵、騎兵の調練を見た。動員された兵力は35000人、大砲93門であった。

8月21日（7月26日）日本使節団との会談始まった。第一回目の会談¹¹は予備宮殿で行われた。ロシア側の全権代表者は外務省アジア局長ニコライ・イグナテフ伯であった。彼は先年ロシア公使として清国に駐在したとき、満州境界問題を解決する成功があった。経験が深いロシア外交官であった。サハリンの境界は会談のテーマの一つになった。アジア局長は、ロシアが最恵国最恵国待遇を受けて、ヨーロッパ列強と同じ条件で、「ロンドン覚書」にある、対馬の開港・関税の引き下げ・保税倉庫の設置についての実行を約束した。イグナテフは、日本の内外情勢を考慮して、いくつか譲歩した。すなわち、常設のロシア政府代表団を任命せず、開市・開港延期に対しても賠償を要求しなかった。

ロシアは他の列強と同じように5カ年の延期を承諾した。サハリンの境界問題は一番難しかったが、日本出発までの間にその問題をめぐる談判は六回行われた。

イグナテフは、皇后は絵が好きだから、絵を描く団員がいるのですが、皇后のために3枚書いてくれないか、といった。高島祐啓、川崎道民は墨絵を3枚（富士山、ネバ川の景色、鳶の絵）描いたそうです。

8月22日（7月27日）、この日もイグナテフ伯はサハリン境界問題の件で予備宮殿を訪れた。第二回談判であった。「境界を論ず未だ決せず」（淵辺の日記）。

8月23日（7月28日）、三使は午前10時ごろ馬車に乗って南8里ほどの所に位置する「ニコラール天文台」を見学した。正午に展望鏡で金星と大角を観た。

8月24日（7月29日）午後2時、三使と随員はネバ川の川口のイエラギン島にイエラギン宮殿に招かれた。夕方になって、花火を見た。ヨーロッパではなびを沢山見たが、その晩一番最大であった。

8月25日（8月1日）、午前中、イグナテフは予備宮殿を訪れて、第三回目の会談であった。境界の問題について交渉があつて、決着に至らなかった。イグナテフは、サハリンの現地を検分して、両国の全権委員がニジョラエフスク・ナ・アムール（ロシア領土）か函館（日本領土）で会談を再開することを提案した。ロシアからR. V. カザケウィチ沿海州総督を委員として出す用意があつた。これに対して日本側は現地検分した上、50度内外で境界を画定できるか聞くと、イグナテフは「ペテルブルグでも、日本またはサハリンでの交渉のときでも、受け入れる訳にはいけま

せん」と答えた。

8月27日(8月3日)、午後、日本使節団は川蒸気船に乗って、イエラギン島で散策して、休んだ。園池で投網(とあみ)では鱒が5匹ほど獲られて帰って、夕食のときに食卓に出してもらった。

8月28日(8月4日)、午後、三使と随員は汽車でコルピナ??コルピノにある工場を見た。

8月29日(8月5日)、午前中、イグナテフは予備宮殿を訪れて、三使と交渉して、サハリン境界問題について談じた。サハリンに対して第四回目の会談であった。午後、昨日訪れた工場からロシア人の技師が二人予備宮殿に来て、水車図面などを淵辺に贈った。

8月30日(8月6日)、三使と随員はツアルスコエ・セローへ行って、エカテリナ宮殿を見学した。武器庫で日本の武器や馬具や金蒔絵を見た。この日、福沢諭吉や淵辺らは、ネフスキ修道院、ガラス工場、磁器工場を見学した。

8月31日(8月7日)、夕方、三使は皇帝の招待を受けて劇場に行った。福沢や淵辺などは高山学校に行った。

9月2日(8月9日)、イグナテフ伯は予備宮殿を訪れて、サハリンに対して境界問題について談判が続いた。成果がなかった。第五回目の会談であった。福沢諭吉は動物学博物館を見学した。マンモス(マモウト)を見た。(「西航記」)。

9月3日(8月10日)、午後6時ごろ、正使と副使は外務大臣の私宅の招宴に行った。福沢、箕作、松木、医師たちは「陸医学校」と「陸軍病院」を訪れた。手術室で手術の時、患者の血液を見て、たちまち気が遠くなって、小人目付山田八郎に室外に連れ出してもらって、水を飲ませてもらって、やっと気に返った。

9月5日(8月12日)、使節団は河蒸気船に乗って、ピイテルホフ(ピイテル夏の宮殿)に行った。使節団は船着場に着いてから、陸上の砲台より十一発の祝砲が発せられた。見学してから夕食をすませ、汽車に乗って夜10時過ぎ予備宮殿に帰った。

9月7日(8月14日)、福沢諭吉は「帝国図書館」を訪れた。この図書館は1814年に創設された。夕方より日本使節団はイエラギン島に遊びに行った。この日はロシア皇帝の即位式記念日のため、祝日であった。

9月8日(8月15日)、市川渡は午後から写真館に行った。淵辺徳蔵は汽車でコルピノの製鉄所を見学した。

9月9日(8月16日)オランダ公使は予備宮殿を訪れて、文久二年五月、松本藩士がイギリス公使館である東禅寺を襲撃した事件のニュースを伝えた。

9月10日(8月17日)、日本人はコトリン島にあるクロンシュタット軍港を訪れた。軍港以外に、製鉄所、武器庫、ドック、砲台、博物館を一覧した。

9月11日(8月18日)、イグナテフ伯は予備宮殿に来て、来る9月14日に「エカテリナ宮殿」で日本使節に暇乞いしたいといった皇帝の伝言を伝えた。また彼は三使および随員全員への贈り物の目録を渡した。

9月12日(8月19日)、午前10時ごろ、三使は馬車に乗って外務大臣ゴルチャコフの官邸を訪れた。ロシア側は開市開港の5ヵ年延期および日本の貨幣制度の変更に同意する旨を認めた。「覚書」(協定書)をサインした。サハリンに対して第六回目の会談であった。プチャチンは1853年に長崎に来てサハリンの境界を画定しようと提議した。1854年にプチャチンは再来日して、「日露和親条約」を締結して、サ

ハリンに対して決着をつけなかった。両国の共有領地（雑居地）となった。次に東部シベリア総督ムラビヨフが軍艦7隻を率いて江戸湾に入ってサハリン問題について交渉を始めた。問題は解決されなかった。文久遣欧使節団はロシア帝国の首都に来てこの問題を解決するのは、三回目の試みであった。ロシア側の最後に、北緯48度内外を露・日の境界としたい旨を發議した¹²。京極能登守以外に、他の団員たちはロシア側の提案を受諾しようと思った。京極能登守は日本の国土を一寸たりとも譲与してはならぬ口実で反対して、ロシア提案を拒否するに至った¹³。結局、露・日両国の全権委員がサハリンで会って、実地に地形を臨検して、協議のうえ境界を画定するといった「協定書」に調印した。夕方に三使は劇場に行った。

サンクト・ペテルブルグ滞在期間中、使節団員たちはサンクト・ペテルブルグで訪れた場所は他のヨーロッパの首都で訪れた場所と同じぐらいであった。おそらく団員たちは予め問題集を持って興味のある場所を検査に行き、資料を集めたのである。

9月13日(8月20日)、カメラマンが予備宮殿に来て、写真を撮った。今文久遣欧使節団の写真コレクションは東大史料編纂所に保管されているが、エルミターージュ美術館の冬の宮殿にもまだ整理されていない使節団の集合写真は1枚残っている¹⁴。団員たちは予備宮殿の広間に集まって写真を撮っていただいたのである。残っていない予備宮殿の広間もよく見える。

9月14日(8月21日)、予備宮殿を外出して、汽車に乗ってツアルスコエ・セローに行った。エカテリナ宮殿に告別の謁見が行われた。夕方サンクト・ペテルブルグに帰った。

9月15日(8月22日)、三使は午後各国公使館に挨拶に出かけた。

9月16日(8月23日)、荷物は早くベルリンに送達した。

9月17日(8月24日)、日本使節団は午前九時ごろ予備宮殿を出て駅に向かった。10時ごろ汽車はベルリンに向かって出発した。

ロシア帝国政府は竹内使節団のすべての輸送費が3914ルーブルに達した。すべての費用の総額61115ルーブル53½コペイカに達した¹⁵。

注

1 Файнберг Э.Я. Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М. Издательство восточной литературы, 1960. С. 206-210.

2 Кутаков Л.Н. Россия и Япония. М. Главная редакция восточной литературы издательства «Наука», 1988. С. 150-152.

3 Черевко К.Е. Зарождение русско-японских отношений XVII - XIX века. М. Наука, 1999. С. 199. 最近、セソエフが1855~1875露日関係について学位論文を書いて1862年の交渉にも触れた。Сысоева Е.А. Сахалин и Курильские острова в русско-японских отношениях 1855-1875 гг. (От Симодского трактата до Петербургского договора). Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. Владимир, 2004. さらにサンクト・ペテルブルグで新聞の資料を纏めた資料集が発表された。Первые японские посольства в России в газетных публикациях 1862-1874 гг. СПб., 2005.

4 Сенченко И.А. Сахалин и Курилы - история освоения и развития. М., 2006.

5 Соколов А.Р. О приезде в Санкт-Петербург японского посольства в 1862 году// 日ロ関係史料

をめぐる国際研究集会2006. 予稿集。2006年3月2日、日本学士院・東京大学史料編纂所。
頁42-57.

6 РГИА. Фонд. 473. Опись 3. Дело 326. Лист 99.

7 「ウラヂミルスキー宮殿」の住所はドオルツォワヤ川岸通り、26. Самойлов Н.А. Памятные места, связанные с пребыванием в Петербурге японского посольства в 1862 г. // Восток в коллекциях первоисточников Санкт-Петербурга. Ниигата, 2004. С. 40-49 (версия на японском языке – там же с. 10-14).

8 鈴木健夫。ヨーロッパの見た文久使節団。早稲田大学出版部。東京、2005。頁172-173.

9 РГИА. Фонд 469. Опись 1. Дело 378. Лист 26-26 об.

10 РГИА. Фонд 469. Опись 8. Дело 2209. Листы 1-22. 残念ながら第二次世界大戦の時、ツァルスコエ・セローもガッチナもナチス軍隊に占領されて、贈り物は残っているかまだ確認しなかったのである。

11 日付は複雑である。日本の日付もあり、西暦の日付もあり、ロシアのいわゆる旧暦の日付もあります。矛盾が残って、全部確認する間に合わなかったのである。ロシア史料によると、第一回目の会談は8月4日であり、第二回目の会談は8月9日であり、第三回目の会談は8月10日であり、第四回目は8月14日であり、第五回目の会談は8月17日であり、第六回目の会談は8月20日であったそうです。Файнберг Э.Я. Указ. Соч. С. 209.

12 宮永孝。幕末遣欧使節団。講談社学術文庫。東京、2006年、頁282.

13 宮永孝。前掲論文、頁283.

14 エルミターージュ美術館の研究員であるボゴリユボフ（Боголюбов А.М.）のお陰に集合写真を見ることができた。

15 РГИА. Фонд 565. Опись 1. Дело 2665. Листы 1-7.